

思いをつなぐ

～ヒロシマで起きたこと、一生～



制作にあたって

令和6年1月時点で、1万発を超える核兵器が、アメリカ、ロシアをはじめ世界の複数の国で保有されているなか、北朝鮮では核兵器搭載に向けたミサイルの開発・実験が繰り返され、ウクライナへ侵攻を続けるロシアでは、戦術核の使用を想定した軍事演習が行われています。また、昨年5月にはアメリカにおいて臨界前核実験が実施されるなど、世界は常に核の脅威にさらされています。

本市では、核兵器による唯一の被爆国として、アメリカ政府に対し、厳重な抗議を行うとともに、さまざまな取り組みを通して二度と戦争を引き起こさないよう、戦争の悲惨さや平和の尊さ、また核兵器の廃絶を訴えていかなければならないと考えています。

この「時をつなぐ平和絵本」は、原子爆弾によって被害を受けた人の高齢化が進むなか、その体験を風化させることなく後世に語り継ぐため、市内中学生のみなさんが、被爆された方の体験を聞き絵本にする取り組みで、制作を通して被爆の実相を知るとともに被爆者の平和への思いを受け継ぎ、伝え、広げていくことを目的としています。

この絵本を通して、被爆者と子どもたちの平和への切なる願いが、一人でも多くの人に届くことを期待しています。

結びに、今回の制作にご協力をいただきました河内長野市原爆被害者の会会長原田靖彦様、副会長岡田浄子様及び河内長野市社会福祉協議会様、並びに市立藤陽中学校絵本実行委員のみなさん、そしてご指導いただいた先生方に心から厚くお礼を申し上げます。

令和7年3月

富田林市



広島での被爆体験を語られる
岡田さん



長崎の被爆状況を説明される
原田さん

令和6年8月6日、富田林市立藤陽中学校の平和登校日に、河内長野市原爆被害者の会より会長の原田靖彦さん、副会長の岡田浄子さんをお招きし、岡田さんより広島での被爆体験を語っていただきました。また、原田さんから写真パネルを使用して長崎の被爆時の状況をご説明いただきました。

終わりに原田さんは「原爆は人々の命を一瞬にして奪いました。いかに原爆が恐ろしいものか、みなさんのように原爆について詳しく調べて、広めてもらって、原爆の悲劇を二度と起こさないように、長崎を最後の原爆の地にして欲しいというのが私たちの願いです。」と思いを述べられました。

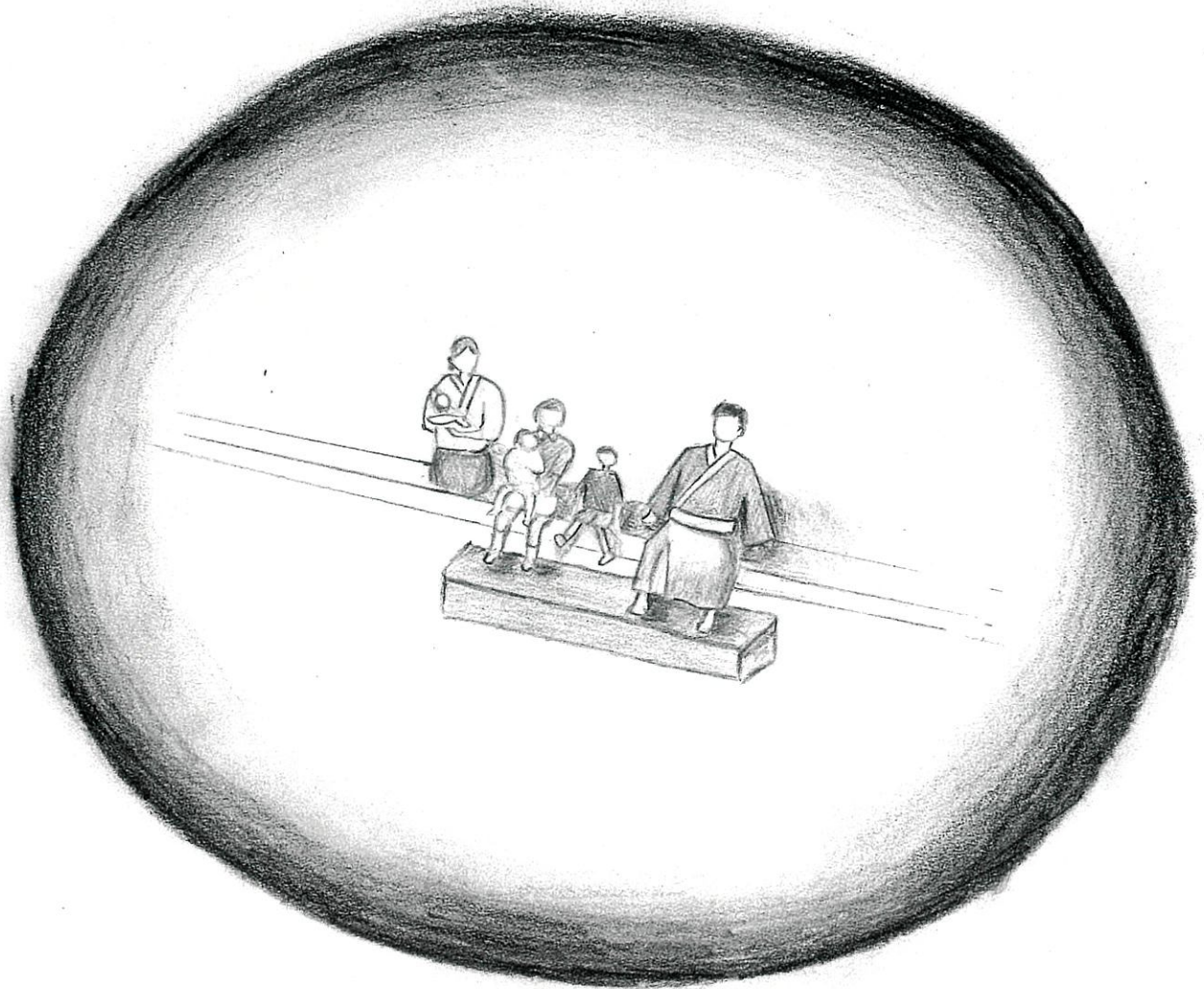


ヒロシマで起きたこと、一生忘れません。死ぬまで。

わたし かぞく にんかぞく
私の家族は6人家族でした。

ちち はは わたし にん いもうと
父と母と私、そして3人の妹がいました。

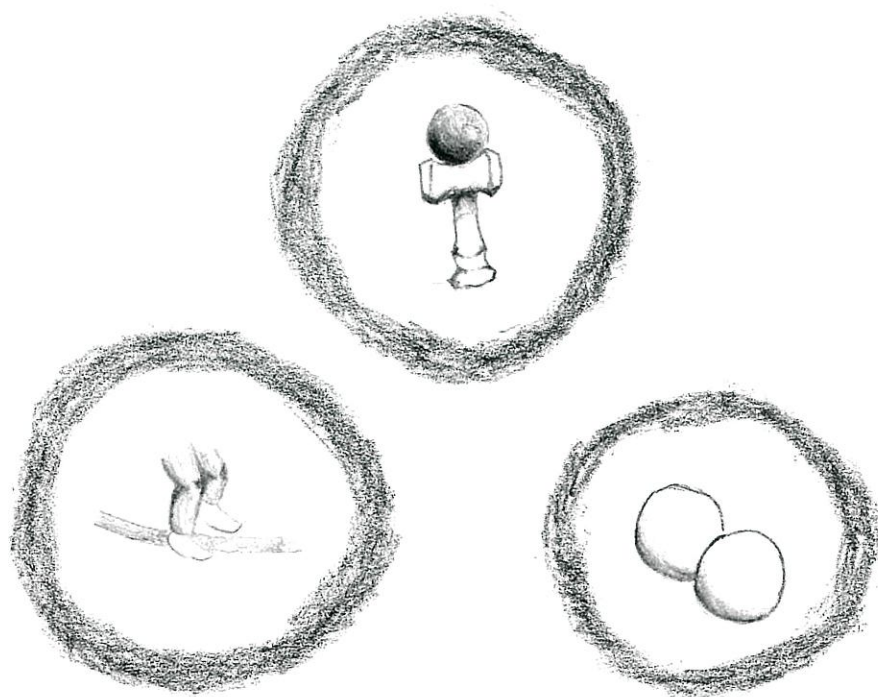
げんぱく お がつむいか わたし さい
ヒロシマに原爆が落ちた8月6日、私は10歳でした。





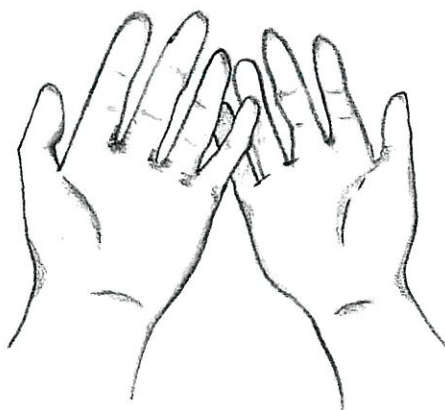
とうじ、^ま「負ける」や「^{せんそう}戦争はよくない」という^{ことば}言葉は

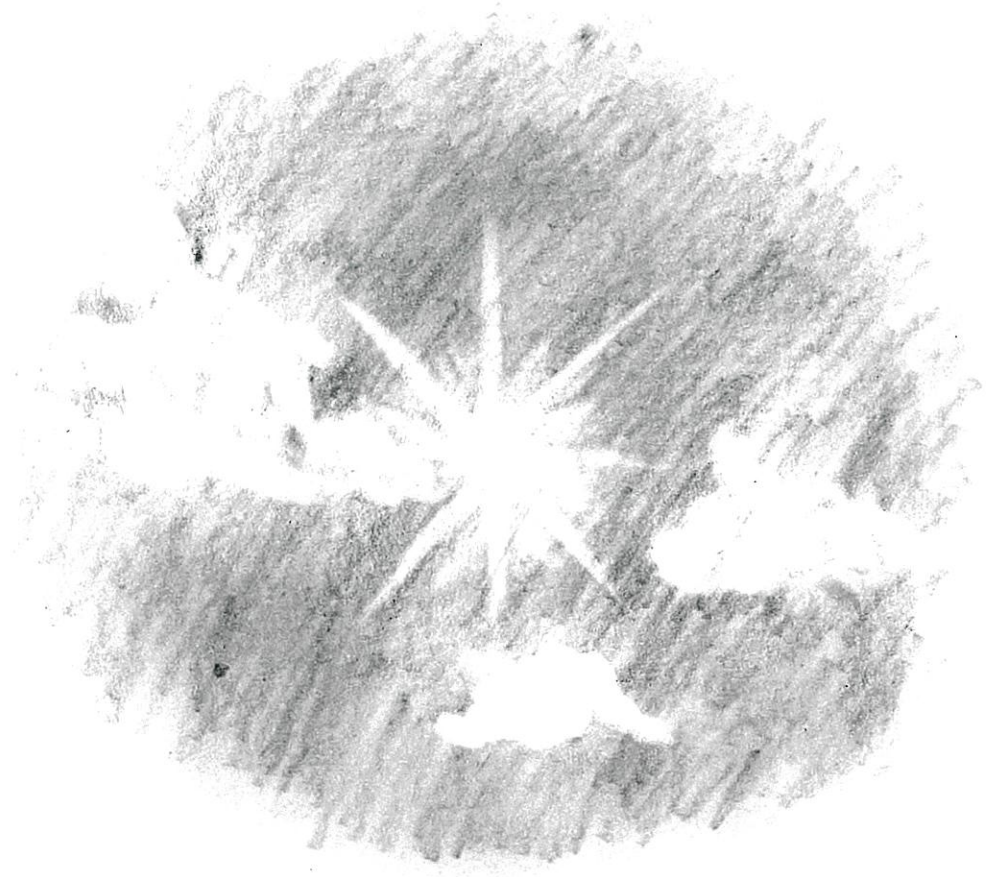
^{けいさつ}警察に^{つか}捕まるので、^い言っ^いてはいけないと言われていました。



とも
友だちとの遊びは鞠つきやゴムとび、鬼ごっこやけん玉でした。

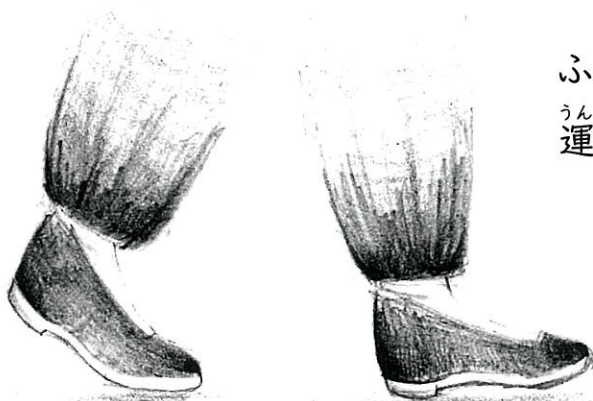
せんそう すす
戦争が進むにつれて食べるものも少なくなり、お腹がすいて
ねむ ひ
眠れない日もありました。眠れても、おいしいものばかりが
て
出てくる夢を見るようになりました。





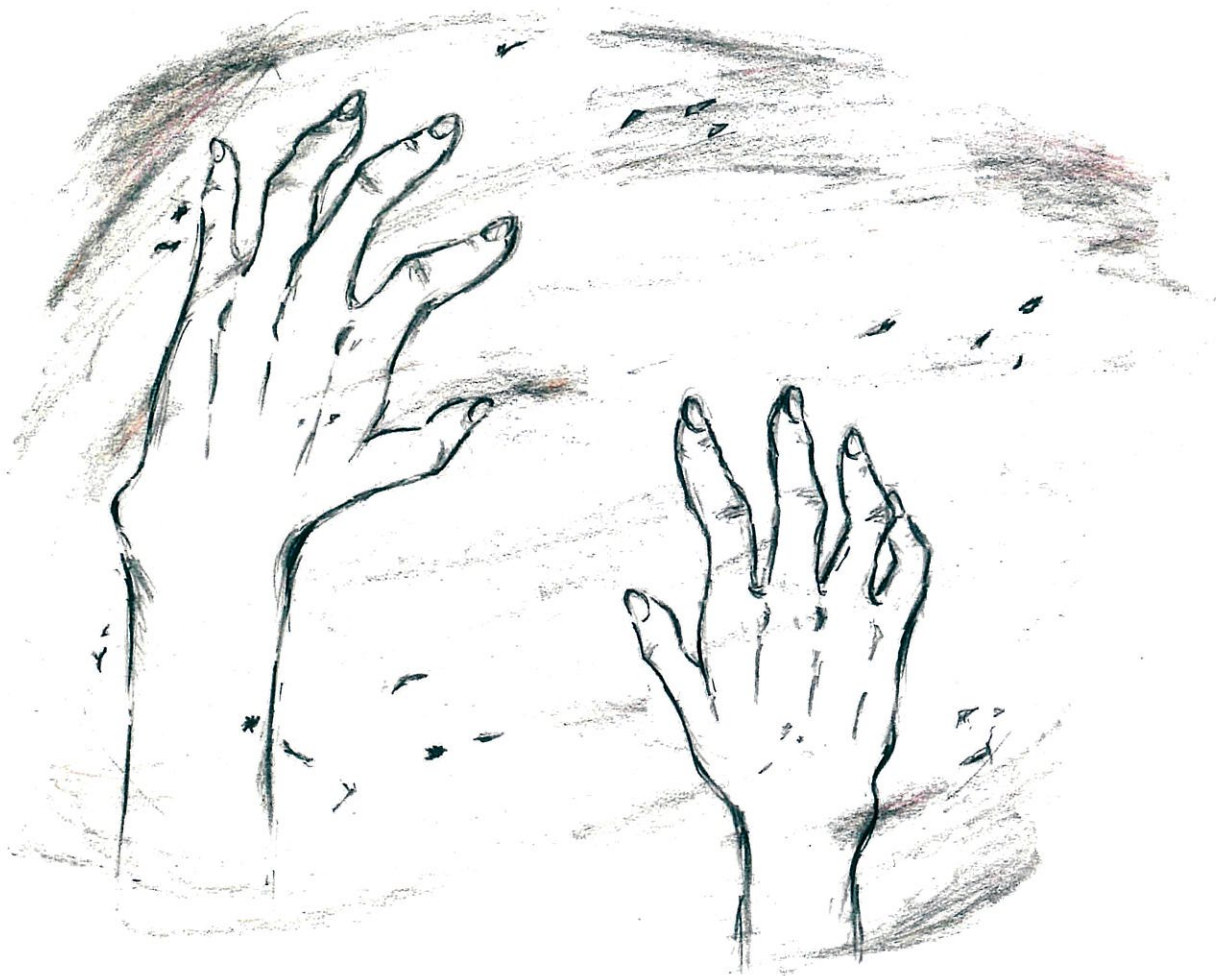
がつむいか あさ わたし
8月6日の朝、私はいつものように
こく민がっこう い
国民学校に行きました。

ふと いい てんき おも
ふと良い天気だなあと思い、
うんどうじょう で
運動場に出た、そのときでした。



^{あおぞら}青空が^ま真^{くら}っ暗になって、

ものすごい^{ねっぶう}熱風に^ま巻き込^こまれました。

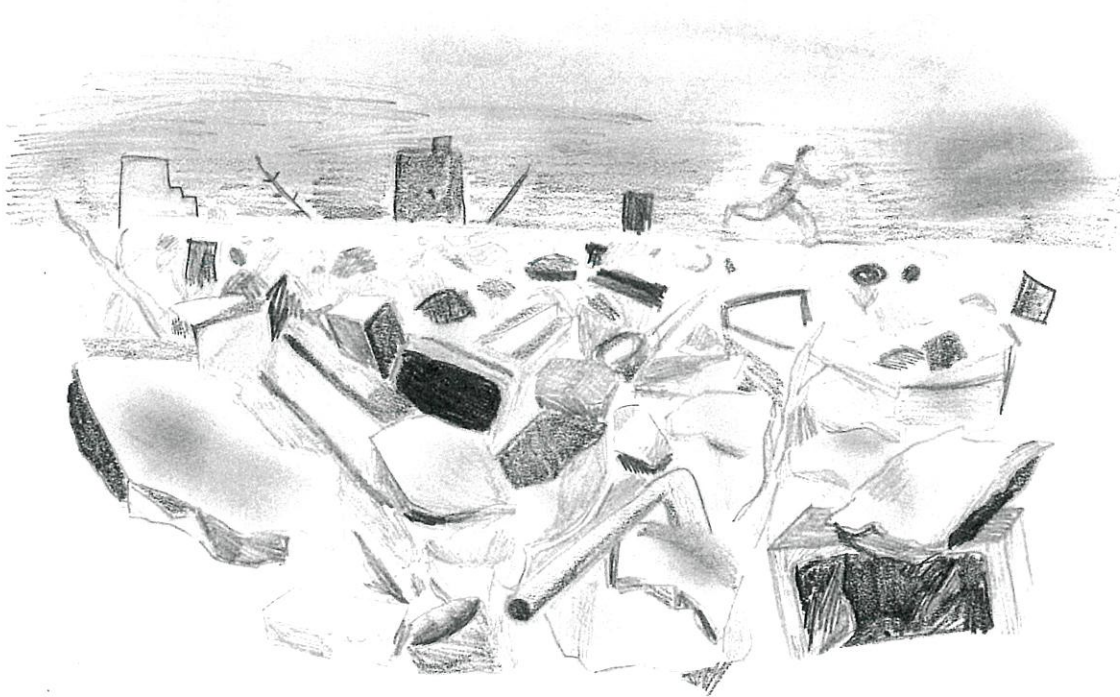


「いたいよう、たすけて！」

なんびょう た
何秒経ったかわかりませんが、

わたし いえ かえ おも
私はとにかく家に帰ろうと思い、

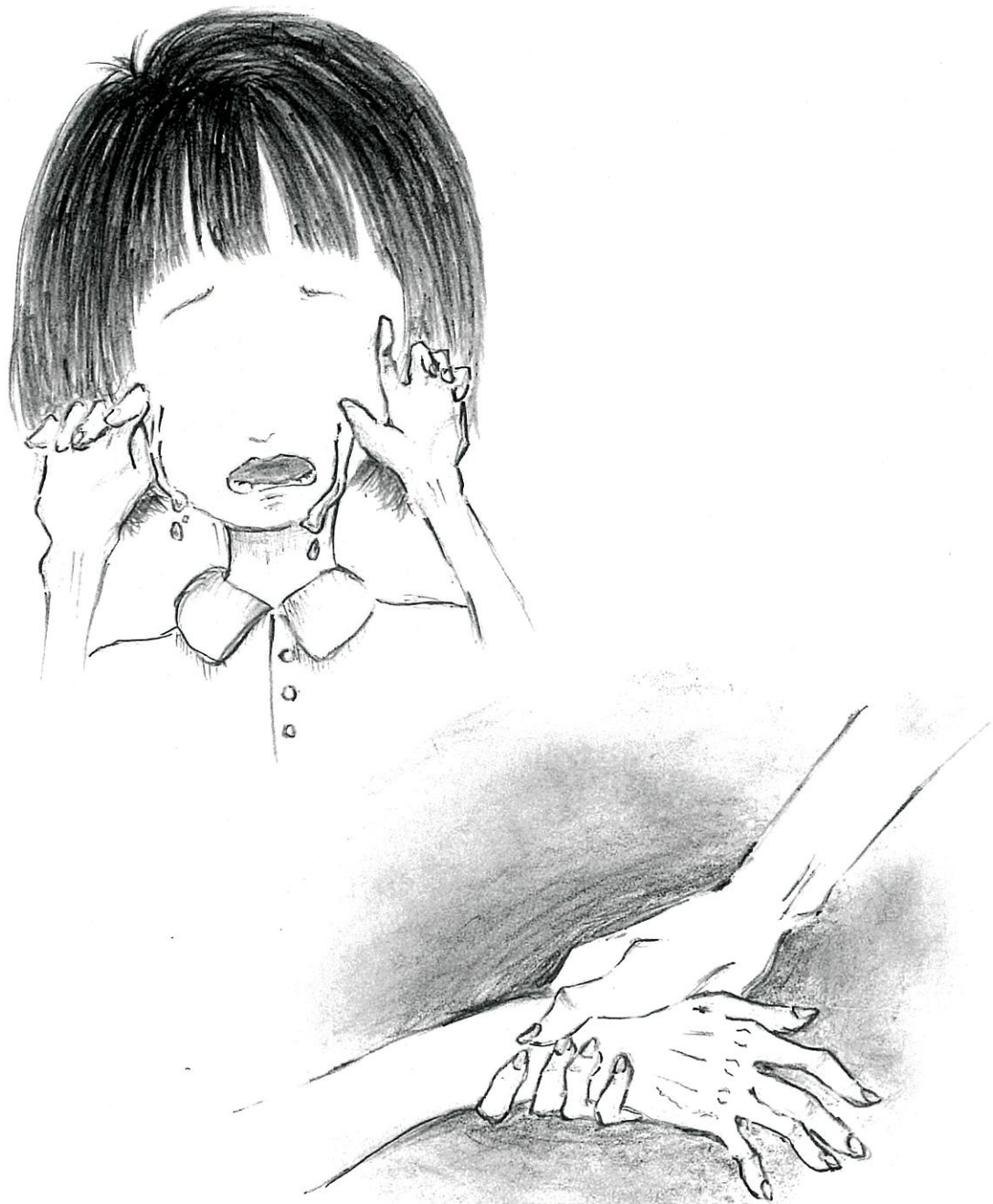
あさ き みち はし もど
朝来た道を走って戻りました。



こわ 壊れたわが家には誰もいなくて、7歳の妹がどこかのおばさんに
つ 連れられて、泣きながら帰ってきました。

いもうと 妹は、私の顔を見ていっぺんに泣き止みました。

わたし 私は、妹の手を引き、練兵場へ走りました。





れんべいじょう ぼうくうごう はい
練兵場の防空壕に入ろうとしたら、

ま くら つぶつぶ あめ
真っ黒い粒々の雨が

わたし ふ
私たちに降りかかりました。



ひ しょくじ へいたい た
その日の食事は、兵隊さんたちが炊いてくれた

なに はい しお
何も入っていない塩おにぎり一つでした。

つぎ ひ 次の日、おにぎりをもろう列に並んでいると、母に会いました。

かたて う 片手に生まれたばかりの妹を抱き、もう一方の手には4歳の妹を連れていました。

そのとき、母に言われて初めて、

わたし じぶん おおやけど 私は自分が大火傷をしていることに気づきました。

それまで誰も言ってくれなかったのです。





^{がつ}8月8日の朝、^{あさ}母と^{はは}妹と^{いもうと}歩いていると、^{ある}

^{まえ}前から^{やけど}ひどい火傷をした^{おとこ}男の^{ひと}人が^{ある}歩いてきました。

その人は、^{ひと}私の^{わたし}顔を見て^{かお}「^み浄子か」^{じょうこ}と言ったのです。^い

^{こえ}声でわかります。^{ちち}父でした。

すぐに^だ抱きつきたかったけれど、^{やけど}火傷でできませんでした。

ああこれで家族全員そろった。^{わたし}私と^{はは}母は^{あんしん}安心しました。



い
行くところがないので、^{かぞく}家族みんなで^や焼け残った^{のこ}国民学校^{こく민がっこう}に行きました。
^{こうない}校内は^{ひと}人でいっぱい、^{みず}あちこちから「お水ちょうだい」という^{こえ}声が
^き聞こえますが、^{だれ}誰もあげられません。



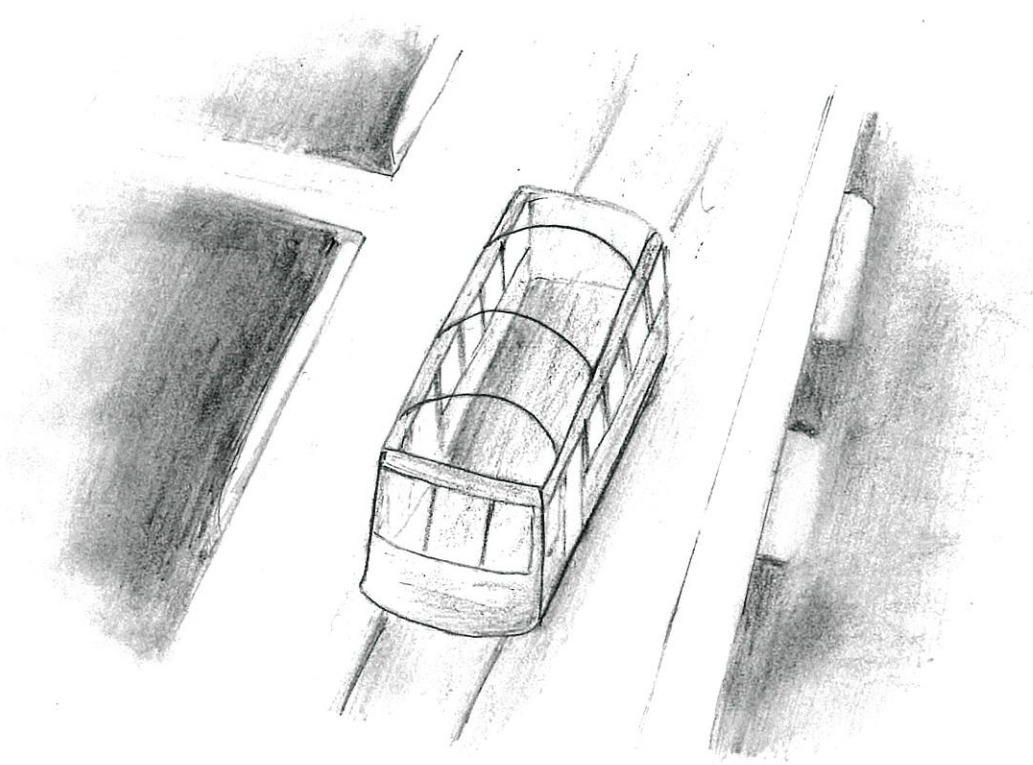


げんばく お よっか た ころ
原爆が落ちてから4日経った頃、

し あ ひと わたし たす
知り合いの人がリアカーで私たちを助けにきてくれました。

あいおいばし わた まち とお ぬ
相生橋を渡り、いくつかの町を通り抜けましたが、

たくさんの人が亡くなっていて、焼けた臭いがたまらなかったです。



あと き はなし
後から聞いた話です。

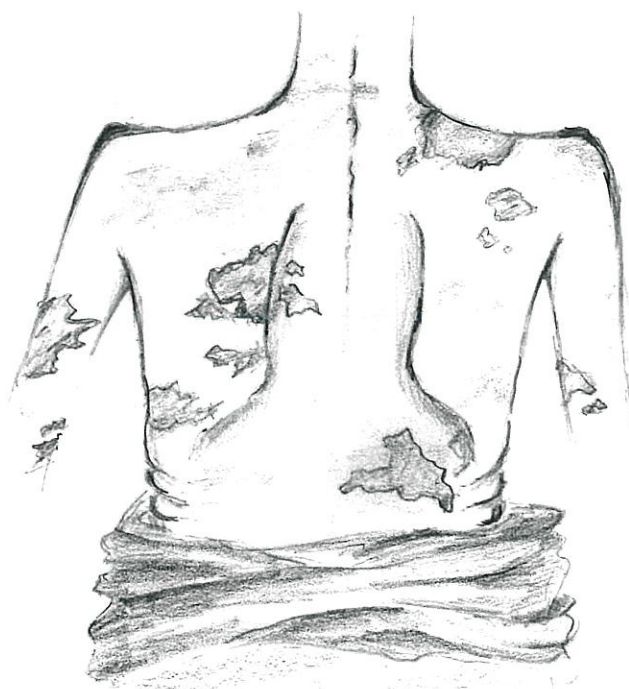
あいおいばし ほう はし まんいんでんしゃ げんばく お
相生橋の方を走っていた満員電車は、原爆が落ちて、

うんでんしゅ じょうきやく た すわ
運転手も乗客も、立ったまま、座ったまま、

みんなそのままで即死だったそうです。

げんばく お いつか ご ふね おんど はは じっか い
原爆が落ちて5日後、船で音戸にある母の実家へ行き、

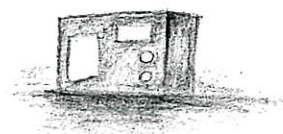
はじ びょういん ちりょう う
初めて病院でまともな治療を受けました。



そして8月15日、戦争に負け、世の中が大きく変わりました。

と
取り締まる人もいなくなり、病院の備蓄倉庫の食料は

だれも
誰かが持っていてなくなってしまいました。



わたし　ちち　たいいん　ちりょう　う
私と父は、退院してからも治療を受けました。

わたし　ねんせい　お　こく민がっこう　い
私は5年生の終わりに国民学校に入れてもらい、

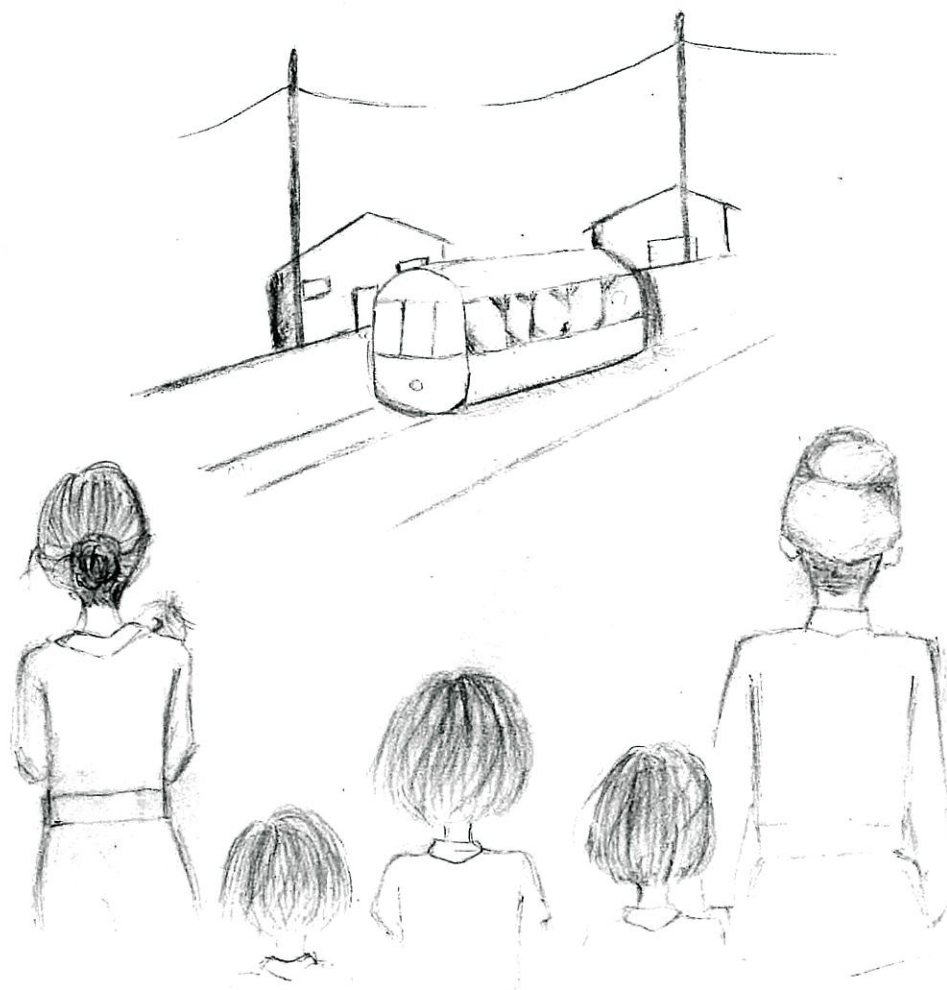
ちち　かか　しごと　い
父はケロイドを抱えながらも仕事に行きました。

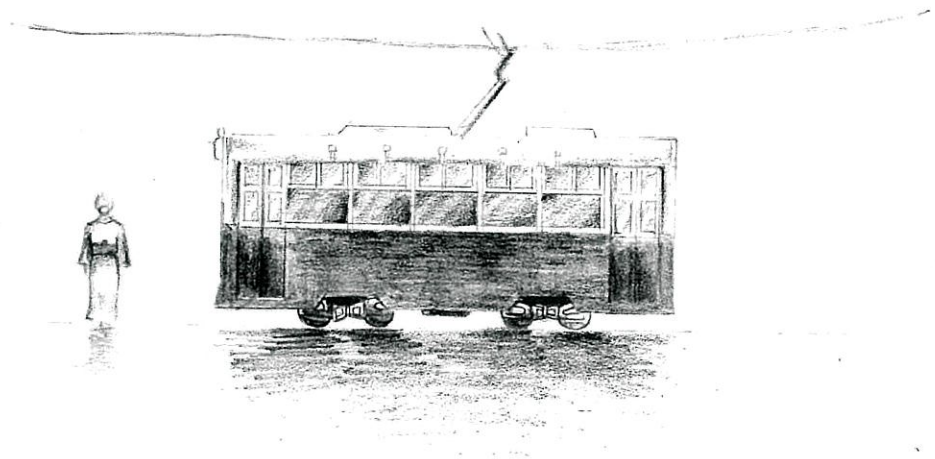


1946年^{ねん}4月^{がつ}にやっと^{ひろしま}広島に^{かえ}帰ることができました。

いえ^や家は焼けてなくなったので、^{せんさいじゅうたく}戦災住宅^すに住みました。

^た食べ物^{もの}が^{すく}少なく、^{がし}餓死^{ひと}する人もいました。



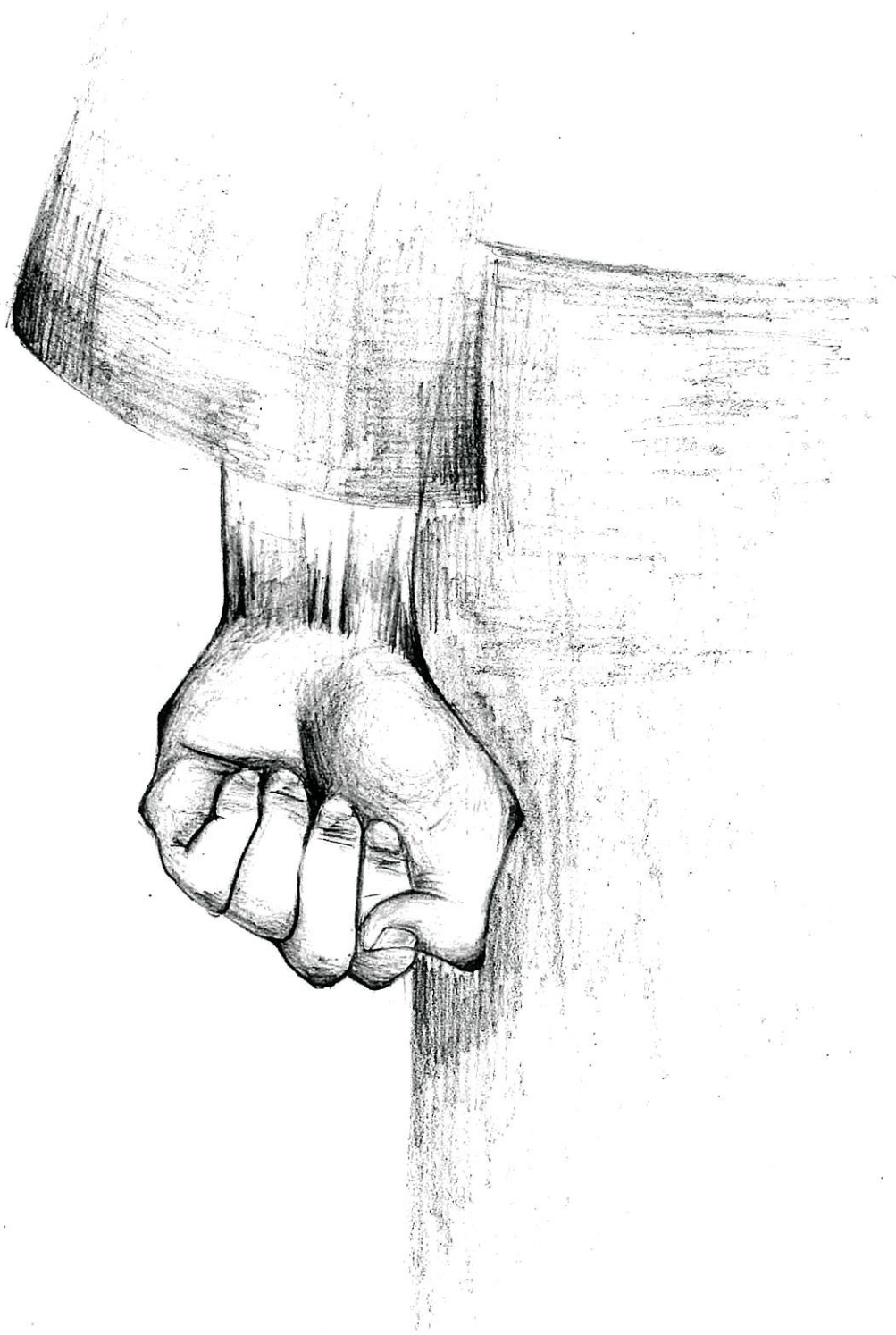


げんばく お ねん にほん しゃかい ふあんてい
原爆が落ちてから5年、日本の社会はまだまだ不安定でした。

わたし こうこう かよ ふみきり かみ きれい きもの き
私が高校に通う踏切で、髪をうんと綺麗にし、いい着物を着て、

れっしゃ と おんな ひと み
列車に飛びこむ女の人を見ました。

い よ なか た
きっと、生きづらい世の中に耐えられなくなったのでしょうか。



わたし ちち い 私 は父が生きていたおかげで高校にも行けましたが、

きんじょ おや な きんじょ い 近所には親を亡くして高校に行けず、

はたら ひと すぐに働かなければならない人もいました。



せんそう 戦争では、わか 若くして いのち 命を お 落と した ひと 人たちがたくさんいます。

ぜったい 絶対に、じぶん 自分の子 しょん 孫を こんな め 目にあわせたくない。

へいわ 平和であってほしい。

そのために、べんきょう 勉強して、せけん 世間に かんしん 関心をも 持って 生きてほしい。

わたし ねが 私の願いです。



ヒロシマで起きたこと、一生忘^{いっしょうわす}れてはいけません。絶対^{ぜったい}に。



《 時をつなぐ私たちの思い 》

～ 絵本の制作に取り組まれたみなさんに、それぞれの思いを綴っていただきました。～

【富田林市立藤陽中学校絵本実行委員のみなさん】

☆ 田中 希実(文章リーダー)

私は、文章と絵の両方を担当させていただきました。岡田さんが一生懸命お話ししてくださった内容は、どこを切り取っても戦争のつらさや残酷さが伝わり、文章にするのが難しかったです。戦争は、たくさんの人の笑顔と大切なものを奪い、誰も幸せにしない、本当に意味の無いものだと思います。

今も世界では戦争をしている国があって、貧困に苦しんでいる国もあって、まだまだ平和な世の中とは言い難いです。いつか、全ての人に笑顔が溢れる、平和な世の中になればいいなと心から思いました。

☆ 墨村 咲希(絵リーダー)

岡田さんが体験した戦争の恐ろしさや苦しさを伝えるために、あえて白黒の世界で表現することになりました。今の日本にはたくさんの色が溢れていて、それを当たり前だと思ってしまいがちですが、それは戦争時代を経験した人達の思いと努力があってこそなのだと改めて感じました。

戦争の記憶は時間が経つにつれて薄れていくので、この絵本制作を通して、少しでも未来に被爆者の思いを伝えていくことにつながると嬉しいです。

☆ 中村 結衣(実行委員長)

今回の絵本の制作に携われたこと、心から感謝しています。被爆者の方のお話を聞いてとても心が痛くなり、「どうして罪のない人がこんなにもひどい目に遭わなければいけなかったのか」という思いが何度も頭をよぎりました。貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。

☆ 石川 みなみ(副委員長)

今回の絵本の制作に関わることができて良かったと思います。私はもちろん戦争も経験していないし、原爆のことも話で聞いたことしかありません。本当の原爆の恐ろしさも知りません。でも、知らない人が増えてしまうということは、恐ろしいことだと思います。過去の過ちを知り、成長できる。備えることができる。繰り返さないことができる。人間はそういう生きものだと思います。

経験した方から実際にお話を聞けるのは、私たちの世代で最後かもしれません。なのでこれから、私たちが伝える側になっていきたいです。忘れないように、忘れさせないようにすることはできると思います。この絵本を読んでいるみなさんにも、そんな気持ちになっていただければいいなと思います。

☆ 真鍋 弦

平和登校日のお話を聞いて、広島原爆ドームも見ました。私は原爆が落とされたときにこんな苦しい思いをしていたことを改めて実感して、このことを次の時代へずっとずっと伝えていきたいと思いました。

☆ 名島 美優

私たちは普段は身近に感じる事が出来ない「戦争」についてお話を聞き、自分たちでも調べて絵本を作ることができて、命の大切さや戦争について改めて深く考えることができました。そして、その当時の人たちのことをよく知り、絵本にして今を生きる人たちに戦争はしてはいけないということを伝えたいと思いました。

「戦争」と向き合って感じた今のこの気持ちを大切に、これからも精一杯生きていきたいです。

☆ 異 彩羽

私は原爆が落ちる前の文章を担当しました。平和の大切さや戦争の怖さを改めて実感して、今の時間を大切にしていきたいと思いました。

この戦争を二度と繰り返さないために、たくさんの人に伝えていきたいと思いました。

☆ 伊勢田 衣織

自分たちのために、戦争のことについてたくさんお話くださった思いを忘れずに、自分たちがこの思いを背負って次の世代へと繋いでいこうと思いました。

戦争のことについては、あまり詳しくは知らなかったけれど、今回のお話を聞いて広島で何があったのかをより一層詳しく知ることができました。

☆ 中村 莉子

岡田さんの戦争について詳しいお話を聞いて、私が岡田さんと同じ状況に置かれていたらと考え、言葉にできないほどの恐怖に襲われました。なので、こんなことが二度と起きないように、次の世代に知ってってもらわないといけないなと思いました。

☆ 火口 歩実

当時のできごとから何年も経ち、原爆が落とされたという記憶が薄れていってしまっている中で、こういう若い世代の人へ伝えていく機会があることがとてもいいなと思いました。これがきっかけでもっと多くの人に知ってほしいと思います。

☆ 早田 悠里

被爆した方がだんだん減っていく中で、絵本を作ったり、お話を聞けたりすることは、本当に大切なことだなと感じました。そして、自分は『関係ない』ではなく、自分が『伝えていく』ということが大切だなと思いました。

☆ 林 一稀

私は岡田さんのお話をうかがって、「戦争のことは一生忘れない」という思いを誰かに伝えなければならないという気持ちでいっぱいになりました。過去の出来事を知るのは大事だと改めて気づきました。

この本を手にとってくださるみなさんに、岡田さんの思い、私たちの思いが届くといいなと思います。

☆ 横山 穂乃香

私は実際に被爆した人のお話を聞いて、「戦争“で多くの人が家族や大事な人たちを失い、苦しみ、つらい思いをしていることを1人でも多くの人に知ってほしいな」と思いました。そして今の生活は当たり前のようで当たり前ではないということを伝えたいなと思いました。

☆ 孟 辰宣

原爆被害者の岡田さんの体験したお話を聞いて、自分が思っていた以上に恐ろしく、残酷でした。岡田さんのお話によると、原爆が落ちた時、走っていた電車の中は運転手は立ったまま、乗客は座ったまま即死だったそうです。電車の中の人たちの親族、友だち、どんなにつらかったか、私には想像ができません。それでもみんな必死に立ち直って、亡くなった方たちの分まで背負って、一生懸命頑張っている姿が素敵だと思いました。そして、絶対に罪のない人たちにつらい思いをしてほしくないと思いました。

☆ 田中 あかり

私は実際に被災された方から戦争のお話を聞くことができたのは初めてだったので、改めて戦争の恐ろしさ、そして平和の大切さを知ることができました。

私は戦争を経験してきていない分、もう二度と人間が同じ過ちを繰り返さないために、これからを生きる人たちに、日本にも戦争をしてきた時代があったということを伝えていくことが今の私にできることだと思います。

今もなお、戦争をしている国、戦争が続いている国が存在します。そのことを決して他人事として捉えてはいけなし、忘れてはいけません。なので私は、この絵本を通して、たくさんの人にどのような時代だったのか、戦争はどれだけ悲惨なものだったのかを想像してもらいたいです。

☆ 宮崎 杏

お話を聞いているだけでも、戦争の悲惨さが伝わってきました。体験された方々は想像もつかないほどの体験をされたんだと思いました。

調べてみると「原爆のことを知らない」小学生、中学生は全体の2割ほど。中学生では、1割ほどいるようです。なので、この絵本を通して、戦争のことを少しでも知ってほしいと思いました。

☆ 井上 璃柚奈

文章を考えるのは難しかったけれど、書いているうちにそのことを本当に自分が経験しているように感じられてきました。平和絵本をつくって良かったなと思いました。

☆ 真瀬 花音

戦争を経験した本人から直接お話を聞けるのは、私たちの世代で最後だと思うので、戦争を体験した人の想いを、この絵本でたくさんの人に届けたいと思いました。

☆ 長谷川 千紗都(教諭)

富田林市立藤陽中学校では、平和学習を大切にしています。

これまでの平和学習を通して、子どもたちが平和をつないでいくために自分たちにできることを取り組みたいという思いで「時をつなぐ絵本」に関わる 18 人の生徒が集まりました。

8 月 6 日に平和登校日で、岡田浄子さんの被爆体験のお話を聞かせていただきました。お話は全校生徒が聞き、子どもたちは「戦争はいけない」という思いはわかっている、本当の生の声を聞くことで、より戦争の本当の恐ろしさ、平和を守ることの大切さを感じ、胸に刻むことができました。

戦後 79 年が経ち、体験を直接聞ける機会が減ってくる中で、戦争がどれだけ恐ろしいものかという感覚が薄れていくことが怖いです。今の子どもたちが直接聞けることがどれだけ貴重なことか、私たちの世代が聞いたことをしっかり受け継ぐことがどれだけ重要なことなのか、身に染みて感じています。

私の祖父母は広島で暮らしていたので、戦争の話はよく聞いていました。教師という立場になった今、平和学習を大切にしたいという思いが強いです。

今回、お話を聞かせていただいた岡田さんの人生を絵本に綴る中で、子どもたちとたくさん話をしました。文章はどこを強調するのか、岡田さんや当時生きていた人の立場と戦争を経験していない自分たちの立場からの目線をどういれるのか。絵では、私たちには想像しきれない人々の怒りと悲しみの表情や色のない世界をどう表現するのか、子どもたちが一生懸命考えていました。当時の服装や建物、原爆の被害での火傷をした身体など、図書室やインターネットで調べて、話だけでなく、しっかり当時のことを知らないとは描けないと、向き合っていました。このような大切な機会に感謝しています。

この絵本の制作に関わった子どもたちやこの絵本に出会った人が、岡田さんの体験を感じ、戦争を絶対に許さない心を受け継いでいくことを期待しています。

思いをつなぐ

～ ヒロシマで起きたこと、一生 ～

令和7年3月発行

《被爆体験者》

おかだ じょうこ
岡田 浄子

(河内長野市原爆被害者の会)

《絵・文章・総括》

富田林市立藤陽中学校

絵本実行委員のみなさん

【絵】墨村 咲希 / 名島 美優 / 伊勢田 衣織 / 中村 莉子 / 林 一稀

早田 悠里 / 火口 歩実 / 真瀬 花音 / 孟 辰宣 / 横山 穂乃香

【文章】田中 希実 / 井上 璃柚奈 / 石川 みなみ / 巽 彩羽

田中 あかり / 中村 結衣 / 真鍋 弦 / 宮崎 杏

【総括】長谷川 千紗都 (教諭)

《編集・発行》

富田林市 市民人権部 人権・市民協働課

〒584-8511 富田林市常盤町1-1

0721-25-1000 (代)

※この絵本は、被爆体験者の当時の記憶に基づいて語った内容を
子どもたちが情景としてイメージしたものです。

